



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)

# 文は信なり

発行責任者・事務局・三浦喜代子

JCP 事務局

〒131-0043

墨田区立花 4-6-13

TEL&FAX 03-3616-8621

郵便振替 00170-0-161838

HP: <http://jcp.daa.jp>

## クリスマス特集号



目次	P1 駒田 隆	P4 三浦喜代子	P6 島本耀子	P9 青葉亜樹子
	P2 遠藤幸治	西山純子	P7 亀井正之	P10 山本千晶
	荒井 文	P5 富岡国広	P8 長谷川和子	安東奈穂美
	P3 土筆文香	P6 榎 尚子	山本披露武	P11 クリスマス童話

日本に初めて福音の種が蒔かれたのは、イエズス会のザビエルによるとされています。彼は一五四九(天文一八)年に来日し、二年三ヶ月で離日しています。

したがって二回のクリスマスを日本で迎えているのですが、その記録は残念ながら残っていません。記録に残っている最初のクリスマスは、ザビエルと共に来日し、彼の後任者として十八年間召天するまで、日本伝道を行っていたトルレス(トレスとも)が、一五五二(天文二一)年山口教会で歌ミサを捧げており、一五六〇(永禄三)年には、山口の戦火を逃れた豊後府内(今の大大分市)で、前夜から降誕劇をした後ミサを挙げています。その後、各地の教会でも行われるようになりました。

### 日本の降誕祭 駒田 隆

一五六六(永禄九)年には、大阪の堺周辺で戦があった時、戦闘中の武士がクリスマスを迎えて敵味方の別なく武器を捨てて、堺の教会で共にクリスマスを祝ったという記録も残されています。

キリスト教が弾圧されてからは、公にはクリスマスを祝えませんでした。隠れキリシタンたちは、クリスマスを冬至のころだったもので、冬至祭として祝っていたことが伝承として残っています。長崎出島のオランダ人たちも「オランダ冬至」として祝っていたと言います。

一八五三(嘉永六)年一二月、開国通商を求めて長崎に入港したロシアのプチャーチン提督に随行した作家ゴンチャロフは、日本人通訳を招いてクリスマスを祝ったと

彼の著作「日本航海記」にあります。

日本にある教会としては、一八六六(慶応二)年に建てられた横浜天主堂(山手教会)における外国人のクリスマス、同じ年の長崎大浦の教師館で、浦上の信徒ら約五〇名(新受洗者二四名)が参加して、クリスマス・ミサが捧げられたのが最初とされています。

プロテスタント教会では、一八七二(明治五)年三月に、横浜公会(日本基督公会、横浜海岸教会)が成立しているのですが、その年にクリスマスがあったと思われるのですが、詳細は知られておりません。

明治から大正にかけて活躍したクリスチャンの社会事業家原胤昭は、一八七四(明治七)年に、東京第一長老教会のクリスマスでは、日本人信者が中心となつて会堂を飾り、クリスマス・ツリーを立て、劇では、袴をつけた殿様姿のサンタクロースが現れたと話しています。

やがて、クリスマスは、福音伝道の拡大と共に日本各地に広がっていくのですが、それは、日本の歴史と共にありました。太平洋戦争のさなか、戦争に迎合せず弾圧された良心的キリスト者たちは、どのようにして御子イエスの降誕を祝ったのでしょうか。現代の隠れキリシタンとも言える人がいたことも忘れることは出来ません。そのことを覚えて、平和な時代における御子の降誕をお祝いしたいと思えます。

『日本キリスト教歴史大事典』

(教文館・一九八八年)





からし種シアター  
曲山迎主(遠藤幸治)

わたしたちの教会に俳優さんがいて「からし種シアター」という劇団がある。スタッフは四、五人の息の合ったメンバーである。全国各地の教会や施設等から依頼があれば、その要望に応じておられる。

数年前に日本キリスト教団発行の「このころの友」という新聞に主宰の中村元則さん(本名河村雅行さん)のことがトップ記事で掲載された。

七年前であるが、燭火礼拝後にクリスマス劇が上演されることになった。上演されるのは、トルストイの名作、愛あるところに神あり「靴屋のマルチン」である。

川村さんは、教会の中からどなたか出演していただきたいのだが、私にどうかという。私は「靴屋のマルチン」という物語の内容も恥ずかしい話だが知らないでいた。「ステハン」という老人が登場するが、その役をしてくれないかという。

さてどうしよう? 頭も呆けてきたし、セリフだって覚えられないのでお断りしたが、セリフも少なく、二言、三言あります。どうかひとつよろしくお願いします。と言われ、呆け老人役なら丁度私に適合しているのか、とにかくその役に徹してみようと意を決め、引き受けることにした。衣装も用意されている。

この物語は名作で、ご存知の方が多く説明するまでもないが、妻に先立たれ、寂し

いマルチンさんは朝から晩まで軽快な音楽のリズムに合わせて一生懸命靴を造っている。

ある時、教会の牧師さんが訪ねて来られ、聖書を読むように勧められる。マルチンさんは一日の仕事を終え、疲れた目をこすりながら、ランプを点して聖書を読むが、眠気がさし、あくびが出てうとうとと眠ってしまう。そうしたなか不思議な声が聞こえてくるのだった。

「マルチン、マルチン、明日お前の家に行くよ」

マルチンさんはびっくりして目を覚まし、イエス様がこの部屋に来るだなんて、本当に来られたらどうしよう? と思っているところに、一人の老いぼれたお爺さんが目の前に現れ、寒そうに雪かきをしている。



また子供を抱いたお母さんも震えながら道端に座っている。リンゴ売りの少女も出てくる。こうした人々をマルチンさんは温かく家に迎えるが、肝心なイエス様は一向に来る気配がない。「やっぱり昨夜のことは夢だったのか」と諦めているところに、再び声があった。

『わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、私にしたのである』(マタイ二五、四〇)。

クリスマスの夜、マルチンさんはこの聖書の御言葉に深く頷くのだった。

会場は子どもたちや、大人の皆さんが一口ソクを点し満面の笑みを浮かべていた。会衆の前でスポットライトを浴びるのも満足でもなかった。感謝!

救い主との出会いの日

荒井文

私にとって初めてのクリスマス

スマスは小学校五年生の時です。

そのころ、父親が東村山の国立ライ療養所全生園に勤めていたので、その看護婦さんに連れられて隣の清瀬カトリック教会へ行きました。本で見たことがあるマリア様が神の子といわれる赤ちゃんを抱っこしていました。この赤ちゃんが「イエス様」で、その誕生日がクリスマスなのでですよと教えてもらいました。その教会で初めて外国人を見たり、楽しい遊びやゲームをしましたりしました。歌も教えてもらいました。

次の年、父が他界。母と共に横浜に移りました。当時横浜はクリスマスともなるととてもきれいでしたが、私には何の関係もありませんでした。

横浜でキリスト教の学校に入るようになりました。そこで再びクリスマスに出会ったのです。学校の礼拝や宗教の授業などで神様のことを教えられましたが、全く理解できませんでした。月二回は教会に行くように義務付けられていたので、あちこちの教会に行きました。宣教師がいる教会はとも印象深かったです。

高校二年生の時、母が他界しました。それからは東京の親戚宅から通うようになりました。横浜の学校に通うのが精いっぱい教会からは遠ざかっていました。



卒業してしばらくすると、びっくりすることがありました。今まで育ててくれた両親は養父母で、実の親がいることを知ったのです。十代の私にはショックでした。そして母方の祖母と再会したのです。祖母から出生の話を聞かせてもらいました。

私を産んだ母はもうこの世にはいませんでした。生母はわたしを産むと自分の命を犠牲にして召天したのです。母は立派なクリスマスチャンでした。母の証を通して神様の愛、犠牲の愛をひしと感じました。人にはしたくてもなしえないことがあります。母は神様を信じていたからこそ、わが身を捨てて子供である私を助けることができたのでした。

今まで学校で神の愛について散々教えられてきましたが、他人事でした。しかし母の証によって本当の愛を知ったのです。母は一粒の麦でした。

母のおかげで神様に出会うことができました。私の罪のため十字架にかかってくださったイエス様を信じようとした私、そんな私の前に母の死が重なって来ました。やっと本当のクリスマスを迎えることができたのでした。クリスマスチャンになることができた喜びは何にも変えられません。

一九三九年は私が生まれた年です。この年こそ「わたしのクリスマス」は始まっていたのです。二十年後に洗礼を受け、神の子とされました。

救い主と出会い、喜びのクリスマスを迎えることができることを感謝しています。



### 神の作品

土筆文香

「あなたの言葉でひどく傷ついた！」  
怒りを込めた友人の声が受話器から流れ  
てきたとき、一瞬間が真っ白になりました。  
どのような言葉が彼女を傷つけたのか  
わかりませんでした。すぐあやまりました。  
あやまっても彼女の怒りはおさまりません  
でした。

わたしはショックでほとんど食事がとれないほどに落ち込んでしまいました。  
どんな言葉であっても、わたしの口から

出た言葉が人を傷つけてしまったのです。  
わたしは加害者です。これからも口を開けば誰かを傷つけてしまうかもしれません。  
家から出ず、誰とも話さない方がいいのでは……とまで思い詰めてしまいました。

それでも数日後、日曜日を迎えたのでわたしは重い心で教会へ行きました。その日の午後は、クリスマス会で教会学校の教師たちが演じるペープサートの指導をする  
ことになっていました。

初めてわたしの書いた童話が教会で用いられ、嬉しくて練習も楽しみにしていたのですが、こんな精神状態でできるのだろうか……と案じ、必死に祈りながら指導をしました。

自分がどのように振る舞ったかわかりませんが、落ち込んでいることを誰にも悟られることなくできたのは、神様が力を与えてくださったからです。

その後、彼女が傷ついたのは、わたしの言葉を誤解して受け止めたからだということがわかりました。彼女とは和解しましたが、傷心のままクリスマスを迎えました。  
今から考えると、なぜあんなに落ち込んでしまったのだろうと思います。わたしに責められるところがあつたとしても、人格を否定されたわけではなかったのです。  
わたしの中にアイデンティティーが確立されていなかったため、責められたとき、全人格を否定されたように思い、過剰に反応してしまったのです。

クリスマス会のペープサートは大成功でも立たないと思っていたロバのロム。それは自分自身がモデルでした。ロムは赤ちゃんイエス様に出会って力が与えられ、後にイエス様を抱いたマリヤを乗せて歩くようになったというストーリーです。



クリスマス会の本番、赤ちゃんイエス様がロムに語りかけるシーンで、イエス様がわたしにも語りかけてくださいました。  
「もう、落ち込まなくていい。あなたはわたしが造った価値ある作品なのだよ」

ああ、イエス様はこのことを知らせるために生まれてきてくださったのですね。  
そのときから、このことを今を生きる子どもたちに伝えたいと切に願うようになりました。

「私たちは神の作品であつて、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。」(エペソ二―10)





## クリスマスとあかしの文章道 三浦喜代子

イエス様の救いに与り、洗礼を受けたのは昭和三十年（一九五五年）クリスマスのことでした。五十数年前のこととは、懐かしさを越して、まるで夢のようです。

かつて、教会では毎年クリスマスになると、あかし文集を発行していました。毎回必ず投稿しました。ガリ版刷りでしたが、自分の文章が載り、多くの方々に読まれることに心が弾み、小さな誇りすら感じました。

四十代半ばごろ、ある伝道団体から依頼されて、そのニュースレターにクリスマスエッセーを寄稿しました。教会だけでなく、もっと多くの人々に読まれることに大きな緊張と大きな喜びを味わいました。「もっと文章を書きたい、書いて、読んでいただきたい」。

氣をよくした私の内に、書くことへの欲望や希望が膨らんでいきました。

ちょうどそのころ、JCP の存在を知りました。俄然、勇んで飛び込んでいきました。四半世紀も前の、熱海での夏季学校でした。「テーマに沿って原稿用紙一枚に書くこと。一字でもはみ出したら失格です」

初めて知った文章道の厳しさにすくみ上がりました。それから、一念発起、世に定評のある『文章読本』を読みまくりました。暗記するほど読みました。さあ、こんなにたくさん理解したのだから、きつと名文が書けるぞと思いきや、物書く世界は広大深遠、針ほどの穴からのぞいたに過ぎないことを骨身に滲みて悟りました。



ところが、あることを知ったのです。かの三浦綾子氏がはらわたを絞るように、『文学的にはいられない』と叫んでいたのです。思わず、「神様、私も、あなたからいただいた愛と赦しを書きたいのです」と御前ににじり寄っていきましました。

その後、文章力のほどはどれだけ上達したかわかりませんが、キリストのすばらしさを書きたいという思いはいつこくに消えませんが、年々膨らみ続け、今では自分の使命とさえ確信するようになりました。

いつのころからか毎年クリスマス目指して、証しやエッセー、童話や小説を書くようになりました。秋たけなわのころ、すでに私の思いは寒風吹きすさぶクリスマスへ走っています。二千年も前のナザレやベツレヘムやエルサレムを想像します。文献もあさりますが、資料以上に聖書です。

受胎告知の天使とマリヤ、ユダの山地へ急ぐマリヤのエリサベツ訪問、マリヤとヨセフのベツレヘムへの旅と滞在、イエス様の誕生、野宿する羊飼い、天使の合唱、家畜小屋へ駆けつける羊飼いたちのシーンが次々に浮かんでいきます。私は、メモと筆記具を握りしめて現場に急ぐ事件記者のような気分になります。かくして、私のあかし文章道は、十五歳のクリスマスから始まり、今年もベツレヘム街道をひたひたと歩きつづけます。

飼いや葉おけに眠る小さなごイエスを拝し、『栄に満ちた喜び』に踊りたいからです。また、そこで新しい出来事に出会い、記事にしたい思いもあるのです。



## 感謝の読み語り

西山純子



その年、クリスマス会の前日、私は発熱し寝込んでいた。その年の本は、頁のめぐり方に少し工夫を要するものだった。万一私が行けなかつたら、誰に依頼しようか？ かつてそのような経験のない私はベッドで悩んだ。祈った。眠っている場合ではないと焦っていた。

私は例年十一月に入ると、児童書店に通い、一時間、二時間、時には一日かけて本を探す。腰をかけて小さな声で読んでみるスペースのある店もあるが、店の端の方、お客の迷惑にならない場所で読みかえし、また探しを繰り返すこともある。図書館にも行く。ここは小さな子供用の椅子に腰掛けて、十冊位の本に時間をかけて読みかえせる嬉しいコーナーだ。一度書棚に戻してから、また十冊選びを繰り返せる。

この読み語りの本選びは神様が私に下さった幸いな恵の時とおぼえている。その時によって、購入するもの、借りるもの色々だが、感謝の時間である。

最後に三冊位に絞って、何度か読み、その後は読み語りの背景に流すCD選びをする。子どもたちの輝く目・優しい瞳、うっとりした顔、話の展開に案じた表情、そのどれもが神様から私へのプレゼントに思える。

子どもたちへの私からの贈り物。それをさせて下さる神様に感謝する。その感謝を今年はさせていただけなのかな。

ふと、気づくと娘がかたわらで私を気遣いある眼でみていた。彼女の口から出た言葉は「ママに代わって私が読み語りするっていうのはどうかな？」

私は心のどこかでそれを願っていたのだと、その時わかった。「それは一番嬉しいけれど、私は彼女が今、仕事で、どれ程忙しい状況に置かれているかよく知っていた。頼みたくてもそれは無理と理解していた。ママのようにはいかなければ、やらせてもらえたら……」感謝で涙がこみあげてきた。

一回練習しただけで、彼女は翌日、めんどろな貢めくりもどうにかやり遂げてくれたようだ。

その年のクリスマスの集会は一つも参加出来なかった。

教会学校祝会の翌日夜半に、私は咳き込みが激しく止まらなくなり、呼吸困難に陥ってしまった。しまい総合病院の夜間外来に車で連れていかれた。

どうやって息を吸い、吐けば良いのかわからなくなつて、一瞬呼吸が出来なくなつたあの時、神の御声を聞いた。

「恐れることはない。私は共に在る」

あの時、天国へこのまま入れていただけのかと、私は苦しい息の中でキラと光を見たような気がしていた。



この上ない贈りもの  
富岡国広

クリスマスといえば贈りもの。

贈りものは贈る側も贈られる側も楽しいものだ、贈る側は相手の喜ぶのを想像し、贈られる側は中味のことでもわくわくさせられ、双方で楽しみを共有する。しかしそのような習慣は私が生まれ育った環境の中では全くなかった。クリスマスだけではない、誕生日を祝うといったことさえなかった。

が、キリスト教とは無縁であった私でもクリスマスが全く意識の外にあつたのかというところではない。値引きされたクリスマス・ケーキを食べるのを楽しみにしていたし、クリスマス・ソングを何曲か覚えてもいた。

「日本人は普段ちつとも信じていないけれど、クリスマスになるとその時だけ一緒になつて馬鹿騒ぎをする」と批評する人たちに加わつて、「そうだ、そうだ」と同調していた私ではあつたのだが。

ものごとをよく考えもせずに、その場の都合であつちにつき、こつちにつきといった日和見主義的な人がいるが、その辺のことを指して言うのだろう。

よく考えず、疑問を疑問としない事はあまりいい結果を生まない。もつと意識を傾ければ世の中が変わるかもしれない。あるいは地上の生活が全てだと、一種あきらめの気持で納得するしかないのか。そうした負の面をうち消す意味で、多くの楽しみを

見つけ、その楽しみのために人一倍仕事をしてお金をかせぐことになるのだろう。

お金が日々の生活を維持する上で大事であることには異論はない。ただ、それも生命があつて初めて成り立つものである。生ある者は必ず死ぬ。死ねばお金は不要である。誰もが知っている理屈なのだが、生きている間、人はそのお金で種々のトラブルを際限なく引きおこしている。多くの財産をもつ喜び以上にである

なぜだろう。やはり人はこの地上でしか喜びとか悲しみを味わう以外にないと思つているからなのだろう。

過去の私もそうだった。一度きりの人生なら、楽しんで方がいいのだと。が、楽しむだけではお金は得られない。仕事は辛く苦しいものだ。そうした堂々めぐりによつて生きるこの意味を見失い、私はウツになつた。

しかしそれがもとで不思議な体験を経て、神さまとの出会いが生まれた。そして、これまで考えたこともない世界が、手にした本の中に星の如く広がつていた。「聖書」である。

いま、私にとつてクリスマスのこの上ない贈りものは、聖書の中の次のことばである。

『あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです』

(ルカ二章 11 節)





きよしこの夜

榎 尚子

昨年、十二月のクリスマスが迫った夕方、外苑前で降りてとある教会へ向かった。チャリティーコンサートに行くためである。原宿という華やかな一等地にありながら、昼間の薄曇りを引きずって真冬のような冷たさだった。

毎年、このコンサートに来ている。共に参加する人も次第に決まって来て、今年も行こうと声をかけ合った。なにしろ今年は四十回目の、そして主催者Iさんのご主人が召天された年なのである。

この会は約四十年前に生まれた。当時同じ教会員だった若者たちが「牧ノ原やまばと学園」という重度障害者福祉施設を訪れ、その働きに感動して立ち上げたグループである。彼らは若さゆえの悩みもあつたろうけど、夢と希望とエネルギーもたくさんあり、一人では無理でもみんなと一緒ならできると力を出し合うことにした。やがてそれぞれが社会人になり、音楽をする人や教員になった人、企業人の人と様々だったが、若い時の志は途切れることなく続き、音楽関係者を中心に成長し、やがては家族をも巻き込んでいった。

この会に「やまばと学園」の方々が来られて聴衆に参加するのも毎年のことで、時折奇声をあげても誰れもふり返らず、一緒に楽しんだ。長い間途切れずに続いたのはIさんの並々ならない努力のたまものである。彼女は見た目は少女のようだが、オルガニ

ストとして教会や大学で幅広く活躍している。

ボロデインの「弦楽四重奏第一番イ長調」はあまり聞いたことのない曲だったが、若い演奏者の歯切れよい、そしてのどかな演奏が心地よかった。弦楽器なのにそつと指を触るだけの奏法が印象的だった。四人の若者はいずれも音大を出て研鑽を積んでいる方がた。

後半はクリスマスソングを中心に進められたが、合唱団の讚美は素晴らしかった。ところどころに声楽家の独唱が入った。

このコンサートではいつも音楽とお話のコラボレーションが組まれている。今年のお話はIさんのご主人が生前書きたためおられたクリスマス童話から選ばれた。まだ五十代で旅立たれたIさんはやりたいこともたくさんあり無念だったろうが、この音楽会は彼の意志をみんなに伝える場となった。サンタクロースの本当の目的は何か、童話の形を取って訴えていた。

一年に一度の再会だが、このクリスマスコンサートを楽しみにしている。クリスマスは家族と共に過ごす日であり、自分が大事にしているものところに帰る日である。私にとつて大事なものは長い年月の間に変ってきている。しかし信仰と家族を第一とすることは変わらないだろう。そしてここ数年、私はこのコンサートをもってクリスマスを始めしているのである。

きよしこの夜、二千年前も今も誰にも等しく来る。静かに華やかでおごそかな時。

神の子生まれたもう。



主よ、ありがとう

島本耀子

小学生の私にとつて、クリスマスは豊かな別世界の物語

だった。学校の休み時間に、日曜学校の話をしている人には何の関心も無く、なぜ日曜日まで学校に行くのかと思つた。

だが、キリスト教は何も知らない私でも、親しい人同士が贈り物をしあうのがクリスマスだと知ると、端切れで小物などを作つて友達に贈つた。

中学三年の時、ミッシェンスクールの高等部に編入するために転校してきた、小豆島の牧師の娘さんと席が隣になった。彼女が書いて見せた、「一麦」という弟さんの名は、珍しい名だと思つた。

ある日、いつになく機嫌のよい顔で父が言った。「今日は賀川豊彦さんと握手をしてきた。温かい手だった」。転校生のノートにも、その名をちらりと見たが、父は牧師さんと会つたのかと思つた。

「叩けよ、さらば開かれん」と、兄がふざけて襖を叩く。「右の頬を打たれたら、左の頬も差し出せだつて！ そんなの痛いよ」と、きょうだいは笑いあつた。いつの間にか、聖書のみ言葉が我が家にも届いていたと気が付いたのはずっと後である。

学校を出てデパートに就職した。年末は月曜日の定休日さえ無くなる職場である。同じ売り場に牧師の娘がいた。彼女は、工事現場で働いている青年も、クリスマスにはネクタイを締めてやってくると言つた。





私は、ポーナスで家族にささやかなプレゼントと、クリスマス・ケーキを買い、一端のクリスマス教徒になっていた。

初めて真剣に祈ったのは五歳の長男が交通事故に遭った時だ。救急病院には様々な宗教の勧誘がくると聞いたが、幸か不幸か、私には誰も来なかった。何を待みに祈れば良いか分からないが、完全に癒してほしいと、切に念ずるのみだった。

長男が回復すると、同様な事故で死ぬ人と、治る人に分かれるのはなぜかと思っただけ、何か大きなものに守られているとしか思えないが、私には何も見えてこない。

勧められたパンフレットは『ものみの塔』で、納得できなかった。般若心経の解説書も読んだが、後は続かない。自分がしっかりするしかないと思い直したら、家族に異端の教えが入りそうになった。信仰のない私は当惑したが、神様は様々な方法で、私に呼びかけ続けていたのだ。長男の事故から二十一年目に受洗して、やっと分かった。

日曜日の礼拝出席が、当たり前でできない人たちがいる。文書伝道は、そのために私たちに与えられた贈りものかもしれない。頑なな私は、三時過ぎにぶどう園に雇われた農夫と同じである。神様は、そんな私にも平等に、信仰の喜びと恵を与えてくださった。クリスマスは、イエス様の誕生を祝う日である。

身勝手な私たち人間の魂の救いのため、十字架上で死なれたイエス・キリスト。これこそ、大いなる贈りものだ。



### クリスマスとウサギ 亀井正之

あの不思議な時からもうそろそろ十年を超えられませんか。私はある小さな教会のクリスマスに出席しました。楽しいはずのクリスマスなのに、それを素直に喜ぶには私の中の何か欠けている気がしていました。

気落ちしながらいつもの通勤の駅を降りて家路をたどっていた時に、それは起ったのです。大方九時は過ぎていたでしょうか。いつも会社帰りの人たちが歩いている道には人っ子ひとり見えません。トボトボと駅からの長いまっすぐの道を歩き始めました。ポーッと歩いて歩いていたのです。

ふと、前方はるかに何か動くものが見えます。目の錯覚かなと思いつつ進んでいくと、それは犬や猫より少し大きな動物のようでした。地面を這うような不思議な動きです。注意してみるとヒョコヒョコと少し跳ねているような動き方です。街灯はありますが、薄暗い道の真ん中をゆっくりと進んでいるのです。すこしゾツとしながらも跡をつけていく格好になりました。なにせその物は私の進む方向に進んでいるのですから。こんな感じは昔読んだ江戸川乱歩の探偵小説のようだなどと思いました。

逃げようかとも思いましたが、どこに行ったらよいかわかりません。方向は同じなのですから必然的にその物体に近寄っていました。



きます。まもなく一直線道路は終わり、角を曲がると団地群の中に入っていく事になります。

角に近づくとその物体との距離もかなり近寄ってきていました。薄暗い中でも色や形が少しわかるようになりました。薄茶色のかかなり長い毛が密生しており、少し上を見ると頭のあたりに二本の耳が後ろに寝ています。やっとな気がつきました。

ウサギでした。それも大きなピーターラビットのようなウサギでした。そのウサギが、どうしたことか人が歩く普通の道をヒョコヒョコと急ぐでもなく歩いているのでした。ウサギだとわかった時、却ってぞーっとしました。なぜこんなところにいるのか、なぜこんな時間に歩いているのかと疑問が頭に浮かんだからです。何のために、なぜ私の前を……。

疑問は深まるばかりです。しかしその物体、いや、そのウサギにもうすぐ追いつくところまで来ています。私は、やっとな覚悟ができました。捕まえようと思っただけです。私は脱兎のごとく走り出しました。しかし遅すぎました。私の足音に気がついたのか、かのピーターラビットは思わぬ素早さで団地の前のレンギョウの植え込みの中に入ってしまった。私はその中を探しまわりましたが、結局見つかりませんでした。

あのウサギは一体何だったのだろうか。神は私に何を教えようとしたのか。

『主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ』

(イザヤ五十五章 6 節)





## 近所の子供たちとともに

長谷川和子

子供が零歳と三歳の時、夫の仕事で仙台に住んでいたことがあった。市内南小泉の大通りから一步入った通りから、更にもう一步入った路地の平屋の一軒屋が住居であった。

クリスマス時期が来ると近所の子供たちに声をかけながら「家に遊びに来ませんか、クリスマスを一緒に祝いましょう。お友達を誘って来てね、まってます」と書いた紙を配った。

買い物に行く度に子供たちの好きそうなお菓子を求め、小袋に豆カードを添えて三〇袋用意した。何人位来てくれるか、と不安な中、「イエスさまのことを分かってもらうためにはどうしたらよいか」と考え、私が話すより、お兄さんの人が良いと思い、当時通っていた五橋教会のCS教師（東北大学生）をしていた小友さんをお願いした。現在小友さんは東京神学大学の教授であり、中村町教会の牧師をしておられる。

一九七三年十二月二十四日午後三時、子供たちは「こんにちは」と言って、思い思いに入ってきた。玄關の上り口の畳敷きの四帖半は、みるみる子供たちで一杯になった。声をかけた子供たちが友だちを誘ってくれたようだ。

「何がはじまるのだろう」と子供たちの目は家の中を見まわし、続きの間に座っている小友さんや動き回っている私を交互に見ながら、にぎやかであった。

私は来てくれたことの嬉しさを伝え、小友さんがイエスさまの誕生の話をするシーンと静まり返った。

大きな模造紙に書いた讃美歌を指でさすと、子供たちは大きな声で「もろびとこぞりて」や「きよしこの夜」を唄ってくれた。純粹な子供たちに胸が熱くなった。

祈りの姿勢を示して、集まってくれた子供たちに「ありがとう」の気持ちと「神さまに守られて元気に過ごせますように……」と祈った。子供たちも素直に手を合わせていた。



「クリスマスおめでとう」と言って一人一人にお菓子の袋を渡した。まるで宝物でも持ったかのように胸に抱えて「もらった もらった」と帰

って行く後姿を見送りながら、『幼子をそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない』（マタイ一九・一四）のみことばが浮かんだ。

仙台滞在は四年であった。この間、毎年子供たちを呼び、小さなクリスマス会をした。「あそこに行けばお菓子がもらえる」と年々ふえていった。五〇人位の子が集まったのではないだろうか。聖書のお話は時にはモルモン教の宣教師が「させて下さい」と言って奉仕して下さった。

四十年前のクリスマス会に集まったあの子供たちは、今や五十歳前後の年齢になっているはずだ。クリスマス時期に思い出すことがあるだろうか。すっかり忘れて思い出すこともないかもしれない。

私は毎年思い出し、あの子供が教会に行ってくれていたらと願うのである。



## 書きかけたままのクリスマス話

山本披露武

書きかけたままのクリスマス話があります。こんな話です。

ジングルベルの歌が流れる街の中を、迷子になった北風の子がお父さんを捜して歩いていました。

「ぼくのお父さんを知りませんか。どこかで見かけませんか」

けれども、大人たちはクリスマスの準備に忙しくて誰も教えてくれません。しかたなく、北風の子は子供たちに尋ねましたが、やっぱり教えてくれません。それどころか、北風の子が近づいただけで肩をすぼめ、耳を塞いで逃げてしまいます。紙袋を抱えて薬屋さんから出てきた少年は、

「なに、北風の子だと？ やいやい、疫病神め、お前なんか消えて無くなっちゃえ！」と目をむいて怒り、走り去ってしまいました。北風の子はすっかり人間嫌いになりました。それからはだれにも尋ねることなく、ひとりでしょんぼりとお父さんを捜して歩きまわりました。

そのような北風の子に、優しい言葉をかけてくれたのがサンタさんでした。サンタさんは「お父さんのいるところを知っているから、連れて行ってあげよう」と、いつてくれました。

けれども、サンタさんには、子供たちが眠っている間にプレゼントを届けてあげなければいけない大事な仕事があります。その仕事が終わってから連れて行ってもらう





ということになって、それまでサンタさんの仕事を手伝うことになりました。

サンタさんの仕事を手伝って  
いる内に、それまで気づかなかったことがわかってきました。北風の子が近づいていこうとしただけで、少年が耳を塞いで逃げてしまったのは、少年がいじめにあっていた、人との接し方がわからなくなっていたからでした。

薬屋さんから出てきた少年が北風の子に「疫病神め」といって怒ったのは、病気の妹に早く薬を飲ませてあげなければと思っ

て急いでいたからでした。  
そのようなことがわかって、北風の子は人間嫌いになって自分自身を恥ずかしく思うように変えられていくというストーリーです。これならおもしろいクリスマス話になるかもしれないと思っ

て書きはじめたのです。ところが大変な問題があることに気がついて、頭を抱えてしまいました。  
住宅問題です。最近の住宅には、サンタさんが自由に出入りできる煙突がありません。それに、迷子になった子を北風の子とするよりも、人間の男の子にした方がわかりやすいのではという声なども聞こえてくるようになって、とうとうペンが止まってしまう

しまいました。  
長い月日が過ぎてしまいました。けれども、すっかり諦めてしまったのではありません。諦めずに考え続けていけば、きっと名案が浮かんできて、納得のいくクリスマス童話になるかもしれないのです。  
そう思っ

の童話の前で頭を捻っています。  
おやつ、どこからか北風が吹いてきたようです。サンタさんの赤い袖も見えてきました。ペンを担いで追いかけてみるとしましよう。



### 祖母と二人のクリスマス 青葉亜樹子

今年の十二月、祖母がドイツニアランドへ行きたいと言いだした。驚きであった。祖母は、今までにテレビでしか見たことがない、行ってみたいと言うのだ。脚と腰が悪く、カートを押しながらでないと歩けない八十歳の祖母といっしょにどうやって園内を廻つたらいいのだろうと考えることになった。車椅子に乗せれば何とかなるだろうと思っ

た。ところが祖母は、「自分でカートを押して歩きたい」と言うのである。  
とうとう師走、極寒の園内を歩くことになってしまった。  
二人で歩いてみると、園内のキャストさんが「よかつたらどうぞ」と小さなパスカードをくれた。初めて見るものであった。アトラクション乗り場に並ぶ時に、キャストの方に

見せるのだそうだ。  
私と祖母は汽車のアトラクションに乗ろうとした。乗り場までは長い階段が続いていた。キャストの方にカードをみせると、「どうぞ！」と案内された。ついていくと、キャストが壁の中に隠れた小さなボタンを押した。とたんに、壁が開いて目の前にエレベーターが現れたのだ。びっくり仰天であった。別のアトラ

クションでは、出口にある壁の中から入ると数メートル先に乗り場が直結していた。

子どものころから何度となく来ていた私であるが、このからくりにはすっかり驚いてしまった。いつも長時間並んで乗った事しかなかったからだ。もちろん並んでいる間も飽きることはなく楽しかったのだが。

下半身の不自由な女性や障害者用バギーに乗った小さな子どもを見て祖母は「みんな遊びにくるんだね」と小さく言った。私は、「そうだよ！」と強く祖母に返した。年寄りの来る所ではない、脚と腰が悪いから乗り物に乗れないと思っ

ていた祖母の心に大きな風穴が開いたようだ。  
私は、初めて見る隅々までに行き届いたバリアフリーに心が暖かくなった。

祖母は、アトラクションでの人形や動物に「よくできているねえ、本物みたいだねえ。」と歓喜していた。私は、パレードに参列しているサンタクロスに手を振った。テレビで見かけたことのない大きなプレゼントの箱が並ぶ巨大なクリスマスツリーの前で、祖母の写真をたくさん撮った。二人とも同じ年頃の子どもにかえっていた。

祖母とドイツニアランドのクリスマスを過ごすのは、今の一回しかないかもしれない。この時しかないかもしれないと思っ

た。これはたしかに神様からのプレゼントであった。しびれるような寒さのなかであったが、私の心は温かく満ち足りていた。祖母は何を思っただであらう。  
『主よ、御業はいかに大きく御計らいはいかに深く  
でしょう』  
(詩編九十二編5節)



クリスマスは訪れた

山本千晶



幼稚園時代のクリスマスの思い出、それは聖誕劇の練習風景である。

「マリア役の女の子に向かって「あな

たはやがて男の子を産む。その子を生かすために、イエスと名付けなさい」と両手を上げて告げる天使に私は扮していた。その時、私はクリスマスの真の意味を体験した。

大人になったある時、教会に通って洗礼を受けた私に、学生時代からの友人が言った。「わたし、クリスマスの頃ってあまり好きじゃないの」

私は驚いた。いったいどういう意味なのだろう。なにが友人にあったのだろう。今でも、そのわけを聞くことはできないままだ。当時、私が教会に通っていることを好意的に受けとめていた友人だったので、意外だった。

それからしばらくして、教会に通い始めたばかりの方が、「お正月とかクリスマスとか世の中が賑やかな時期は、私のような一人暮らしの身には辛いものがあります」と話されたことがあった。

「私たちを救うためにこの日、イエスさまがお生まれになりました」と、その喜びを互いに祝いあうその一方で、イエスさまへ心を開くことが困難で、辛い思いのままクリスマスを迎える方もいるのだと知った。

私の通う教会ではクリスマスに、この町でコンサートを計画してきた。町の賑やかさから少し距離をおいて、心静かに、それ

ぞれの胸の中に抱えている思いを慰め励まし勇気づけてくださるお方がいらつしやることを、音楽を通してお伝えできたらと、祈りながら準備を進めてきた。

人と人がわかりあうのは難しいものだと思う。無理にわかろうとせずにはわからないそのままでも、ともにいられたらと思う。

毎年、クリスマスコンサートへの準備に關わる一人一人がさまざまな思いを携えながらコンサート当日を迎えている。いっしょに準備する互いの関係を通して、少しずつ育てられていく気がする。それは、わたしは決してひとりではない、どんな時も、イエス様というお方がともにいてくださるのだということである。

『その子をイエスと名付けなさい』天使が告げた言葉の意味を、その時のマリアはよくわからなかったかもしれない。けれど、その通り、クリスマスは訪れた。

「私はクリスマスの頃を好きになれない」と話していた友人にも、イエス様と出会う喜びの時が訪れることを、ずっと楽しみにしている。

『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、「神は我々と共におられる」という意味である』

(マタイ一章 23 節)



ともしびの中に

安東奈穂美

キリストの降誕を待ち望むアドベントに入ると、礼拝堂の前にはろうそくが点される。ろうそくは四本あり、一週間に一本ずつ、四週目にはすべてのろうそくに点火される。ろうそくは円形の土台に立てられ、その土台は樹の枝や葉が飾られている。

教会に通い始めたのは中学一年生の春で、色々知らないことばかりだった。四本のろうそくを立てて飾ってあるものは「クラランツ」というのだ、と友人が教えてくれた。その佇まいが何か清らかなものを感じさせ、心が惹かれた。ろうそくの光も、それまでに見たものとは何か違うように感じられた。

私はイエス・キリストを信じるようになり、静かにクリスマスを祝いしたい気持ちになった。しかし、私が育った家庭はクリスマス・ホームではなかった。そのような習慣はなかった。

中学三年で洗礼を受けた頃だっただろうか、私はティーカップの形をした小さいろうそくを買った。上から見ると、カップの直径は三センチくらい、ミニチュアのようなものだった。

クリスマスシーズンのある夜、家族のいる部屋から離れ、自分の部屋で一人になった。その小さいろうそくに火を灯してピアノの上に置いた。電気を消すと、ごく小さな光が周りがほんのりと明るくなり、ピアノの前にすわるとその熱も伝わってきた。

小さくゆらめく炎を見つめながら、イエスさまがお生まれになったクリスマス、と静かな喜びに満たされた。

後にクリスマスチャーンと結婚し、三人の子供が与えられて、家族で教会に通っている。

クリスマス・イブのキャンドルサービスでは、委員の方々が様々な企画を立て、楽器の演奏や演劇などでキリストの降誕を祝う。出席者も多く、一回の礼拝で二百名以上いるのではないだろうか。礼拝の後半には全員のろうそくに火が点される。数多くの光が星の輝きのようにも見え、厳かな空気が漂う。

大人になるにつれ、何らかの企画に関わって準備に追われたり、カレンダーとにらめっこという年もあった。家庭でクリスマス会をするにも、家族一人ひとりが忙しく、スケジュール調整が必要になってきた。

しかし、どんな時でも静かにろうそくの光を見つめると、穏やかな気持ちになり、かつてたった一人でクリスマスを祝っていた自分の姿も思い出す。同時に、ともしびれの中にイエス・キリストを感じるのである。これからも、純粋にキリストの降誕を祝いたいと願う。

『すべての人を照らすまことの光があつて、世にきた』

(口語訳・ヨハネ・

一章 9 節)



## クリスマス童話

### マロンとフロンの水くみ

三浦喜代子

★母さんの言いつけ

マロンとフロンがベッドに入ったときでした。母さんの声がありました。

「二人とも、いそいで起きてきて」

母さんはあわてているようです。いつもよりすつと早口で、大きな声です。

「なんだらう？」

「どうしたんだらう？」

二人はふたこの兄弟です。飛び起きて顔を見合わせると、母さんのそばへ駆けていきました。

「水がたくさんほしいの。井戸へ行つてちょうだい」

マロンとフロンはまた顔を見合わせました。

こんな夜に、水をくみに行きなさいなんて、今日の母さんはとつても変です。

「お水？」

「たくさんいるの？」

裏口からばあちゃんが入ってきて、心配そうに言いました。

「わたしがいっしょに行こうかのう」

「いいえ、赤ちゃんが生まれるお手伝いをしてください」

母さんはきっぱり言いました。

マロンとフロンは目を丸くしました。

「赤ちゃんが生まれるって？」

「どこで？」

「家畜小屋に休んでおられる旅の人だよ。ばあちゃんが教えてくれました。」

「夕方、泊めてくださいって来た人たちのこと？」

「やさしそうなおじさんときれいなおばさんだったね」

母さんは顔を近づけると二人の目をのぞき込んで言いました。

「赤ちゃんが生まれるとすぐにお湯に入れてあげるのよ。たっぷりのお湯にね。だからお水がほしいの」

「小屋の入り口に荷車を出しておくよ。大きなかめでも運べるから」

ばあちゃんが出ていくと、母さんも台所へいそぎました。

マロンとフロンはすこし心配になりました。水くみのお手伝いならしたことはあるけれど、二人だけでは一度もありません。

「がんばろう」

マロンがいつもより太い声で言いました。

「うん。二人だから、きつとできるよね」

フロンは細い声でした。

★水をくみに  
外は星明かりだけです。井戸までは坂を上り、坂を下り、狭くてでこぼこの道を行かなければなりません。

「父さんがいれば、してくれるのにね」

フロンは心細いのです。

「しかたないよ。へフロンのお役所に登録に行ってるんだから」

マロンが言い聞かせるようにいいました。

「家畜小屋の人たちは遠くから来たみたいだね」「たしか、ナザレからだつてばあちゃんと言った」

井戸に近づくと、水をくむ音がします。人がいるようです。夜に人がいることはほと



「んどありませんから、二人はずこし明るい気持ちになりました。」

「どうしたんだい、マロンにフロン。こんな夜に」

パン屋のおじさんでした。二人の家では毎日おじさんのお店にやぎの乳を届けます。おいしいパンを作るのに使うのです。

「あのね、おじさん。母さんがお水がたくさんほしいんだって」

フロンが話し出しました。つづいてマロンがわけを話しました。

「ふーん。ナザレから登録に来た人に赤ちゃんが生まれるのか。ベツレヘムまでは遠かったろうね」

おじさんは深いため息をしました。

「ローマの皇帝も面倒な命令を出したものとつても迷惑だよ。でも背くことはできない。わしらの国はローマの属州なんだから」

二人にはおじさんの言うことがよくわかりませんでした。

「よーし。おじさんが水をくんであげよう。旅の空で生まれる赤ちゃんのためにね」

水が勢いよくかめに入っていきます。じきにいっぱいになりました。

「おじさん、ありがとう」

「ありがとうございます」

「元氣な赤ちゃんだといいいね。気をつけてお帰り」

暗い道に荷車の音が響きます。でこぼこにくると、ときどき水が飛び散ります。マロンが車を引いて、フロンがかめを押さえています。

「赤ちゃん、生まれたかな」

「いそがしくちや」

下り坂にきたときでした。

「あつー」

マロンの声が出て荷車が傾きました。

「ああつー」  
バシャン

かめが横になって、水はすっかりこぼれてしまいました。フロンはびしょぬれです。

「たいへんだー」

「空っぽだよ」

二人はわっと泣き出してしまいました。

「帰りたいよー」  
フロンの声が震えています。  
「帰れないよ。お水がなくちゃ赤ちゃんが困る。母さんも、ばあちゃんも、旅の人たちも困るー」

ほんとうはマロンだって帰りたいのです。

「どうしよう」  
「どうしよう」

\* 赤ちゃんが生まれた！

家の方から声が聞こえました。ばあちゃんです。走ってきます。

「はやく、はやく。もうすぐ生まれるよ」

「ばあちゃん……」

「お水が……お水が……」  
マロンもフロンも涙声です。

「どうれ、お水をみせてごらん」  
そのとき、空から光の束がふつてきて、か

めの中まで差し込みました。三人の顔もくつきり見えました。

「ばあちゃんのかめをのぞきました。」

「まあ、こんなにいっぱい。二人ともよくやつたね！」

「えっ？」

「あつー！ お水だよ」



ほんとうに、水はかめの口までいっぱいです。光にゆれてきらきらしています。

「これだけあればじゅうぶんだよ。さあ、いそいで」

マロンもフロンも不思議でたまりません。二人はそつと肩を寄せあいました。

そのとき、赤ちゃんの泣き声がありました。とっても元氣な声です。

「二人とも、聞いたかい。赤ちゃんが生まれたー！」

ちようど家のま上に、大きな大きな星がかがやいています。

「フロン、明日も水くみにこようね」

「うん。赤ちゃんのためにそうしよう。こんどはきつと成功するね」

二人はぎゅつと力いっぱい手を握りあいました。

おわり



### 編集後記

★原稿募集から締切りまで、わずか20日間。たいへんせわしい作業でしたが、ぞくぞくと作品が寄せられました。締切り日の真夜中に2つも飛び込んできた時には、さすが我がJCPメンバーと、その根性に大感激！大感謝でした！いつもながら、YS姉のレイアウト力あつての完成です。

主の御名はほむべきかな！（KM）

★ときに深くうなずき、楽しみつつ、真っ先に読めるのは編集者の役得？ 多くの方々が本当のクリスマスを迎えられますように。クリスマスおめでとう！！（YS）